

歴史エッセイ

桃山画壇の巨匠 雲谷等顔

雲谷等顔(一五四七〜一六一八)は、毛利輝元(一五五三〜一六二五)の御用絵師として桃山画壇で活躍した人物です。昨年はその没後四〇〇年に当たり、山口県立美術館では大規模な回顧展が開催されました。(二〇一八年十二月九日に無事終了)当館からは、「鹿図屏風」と「山水図巻」の二点を貸し出しました。

雲谷等顔については、この「没後四〇〇年 雲谷等顔」展の図録に大変詳しく書いておられますが、中でも等顔と吉川家の繋がりについて、また当館の所蔵品について、簡単に紹介したいと思います。

雲谷等顔の本名は原直治といい、肥前国藤津郡野古見(佐賀県鹿島市)城主・原直家(尚家)の息子と伝わっています。しかし原家の滅亡以前に京都へ出て狩野派に入門したため、その前半生は詳しくわかっていません。

天正一八年(一五九〇)、狩野派から独立し、毛利家仕官を決断したと伝わります。その三年後の文禄二年(一五九三)には、輝元から雪舟流の継承者に指名されました。そして、雪舟の旧居・雲谷軒と、有名な雪舟の大作「山水長巻」(毛利博物館所蔵)を賜りました。この時から、姓を雲谷、名を雪舟

等楊から一文字とつて等顔としました。当時は、大画面の障屏画が多く残されていることから想像できるように、一人ではなく、「等顔工房」として複数人で数多くの注文に応えており、実際にその証左となる作品も残されています。工房の主なメンバーは、長男・等屋、次男・等益、弟子の三谷

等宿と雲澤等悦、そして吉川家の御用絵師である斎藤家の祖・斎藤等順です。斎藤等順の作品は現存しているものが少ないのですが、岩国徴古館が所蔵しています。また、輝元は吉川広家に対して、等顔が画事の御用で江戸へ行く際には、等順も同行するようにと依頼したそうです。それほど、等顔工房の中で重要な人物だったということでしょう。

〈吉川史料館の所蔵品について〉  
今回、展示された当館所蔵の等顔の作品についてですが、「鹿図屏風」は六曲一双で、各一四九・九×三二四・二・六cmと大きなものです。右隻には二頭の牡鹿と一頭の雌鹿、左隻には牡鹿と雌鹿が一頭ずつ描かれています。どの鹿も表情豊かで、全体にほのぼのとした憩いの風景として描かれています。墨一色で描かれています。細かな体毛の毛描きや塗り残した白い斑点、背中の中の毛色の濃淡の柔らかさに対して、角は硬さを感じるまでにしっかりと描写してあります。また、鼻先のザラザ

ラした所を小さなドットで表すなど、面白い表現です。植物は槇と松の若木、そして笹が描かれています。こちらは鹿に比べると少なめの手数で植物の生え方を捉えており、画面に奥行きとリズムを作り出しています。また、このように鹿を主題にした作例で等顔以前のものにはほぼ現存せず、当時としては珍しいそうです。



鹿図屏風 雲谷等顔筆 桃山時代

「山水図巻」は、等顔の中〜後期の作品で、水辺の風景が横に連続して描かれた図巻です。緻密に描写するというよりは、墨の濃淡はもちろんのこと、筆の形や大きさ、毛の種類などを知り尽くした上で、それらを操って構成された画面と言えます。紙の上に残されたのは「筆あと」なのですが、それぞれが舟や島、木々や遠くの霞んだ山々などを表していて、美しい表現になっ

ていることがわかります。また、筆の他に平筆や刷毛も使用した多様な「筆あと」があり、それが全体を鑑賞する時の楽しさに繋がると思います。

(参考文献)

- 『没後四〇〇年 雲谷等顔』  
山本英男・福田善子・樋口尚樹著  
山口県立美術館  
二〇一八年十一月一日発行
- 『日本の美術 第323号 雲谷等顔とその一派』  
山本英男著  
至文堂  
一九九三年四月十五日発行

(吉川美奈子)

編集後記

▽1月2日より「吉川家の茶道具展」を開催します。藩祖広家のゆかりの品をはじめ、伝来の道具の数々、室町時代の闘茶記録など多様に展示しております。皆様のご来館をお待ちしております。  
(原)

吉川史料館

〒741-0081

山口県岩国市横山二丁目七之三

FAX TEL  
〇八二七・四一・一〇一〇  
〇八二七・四一・三一〇〇